学問と人生——西田幾多郎の書簡にみる

石神　豊

はじめに

西田幾多郎（明治三年—昭和二十年）は、折々に多くの手紙や葉書を書いた。宛先は、近親、友人、知人、門下その他にわたっている。現在、全集（十八、十九巻）に取捨選択されて収録されたものだけで二七一六通を数える。全集の後記（Vol.19, p.809）によれば、第一次全集のために収集されたものは封書一七二五通、葉書二三一三通であり、その後第二次全集のために新たに収集されたものが封書・葉書あわせて六〇〇余通、第三次全集にあたっては一〇三通が収集されたとあるから、その総数は封書・葉書あわせて四七〇〇通を超えることになる。また、散逸したもの、あるいは所有者から提供されなかったものも相当数あるとみられるから、おそらく五〇〇〇通を優に超える数になるだろうと思われる。

現代は、携帯電話やEメールに象徴されるように、戦前とは比較にならないほど多様な通信手段がある。日本では最初の電話が一八八九年（明治二二年）に開設されたといわれるが、しかし第二次大戦前は、一般家庭にまだ電話の普及はな

かった。つまり西田の時代、主な通信手段は郵便以外にはなかったのである。しかし、こうした時代の較差を考慮しても、西田の書簡の数は相当多いというべきであろう。

西田はある時、友人の山本良吉に宛てて「君はどうもよく古い手紙を保存している。そんなものを出されては困る。小生のものだけはどうか全部焼き捨ててくれたまえ」（No.613, S.5.4.7）と書き送っている。しかし山本はおそらくこの文面も無視し、若き日からの無二の親友の手紙を大切に保管したのであろう。ちなみに、公表された山本宛の書簡は一九八通にのぼっている。

右の西田の言葉のように、書簡のほとんどはあくまで私信であり、公表されることを予期して書いたものではない。しかし書簡には、それなりに筆者の端的な心情や、忌憚のない意見が述べられており、現在では西田研究にとってかなり重要な意義をもつものとなっている。戦後、公刊された個別的な書簡は、『西田幾多郎の手紙』（田部隆次宛の書簡、田部隆次編、昭和二二年一〇月、斎藤書店）、『永遠の影』（山本良吉宛の書簡、西田外彦編、昭和二三年六月、斎藤書店）、『西田幾多郎の手紙』（鈴木大拙宛書簡、古田紹欽編、昭和二五年四月、新潮社）などがある。しかし、西田の書簡全体に関してまとまって考察したものはないといってよい。

本稿は、西田の人物像の一端を知ることを目的として、それを書簡によって試みたものである。したがって書簡全体を考察するものではない。ここでは三つのテーマ（「学問について」「家庭と人生」「時代の波に抗して」）を設定し、それに関して彼の折々の所感や意見を通覧的に集めてみた。これとて網羅的とはとてもいえないのであるが、幾分かは西田幾多郎という人物像が浮かび上がってくると思う。書簡には、かなり思想的内容をもつものもある（たとえば田辺元宛のものなどは代表的である）が、ここでは思想的に深く立ち入ったものは原則として除いた。

一　学問について

西田は明治三十二年（西田二九歳）から金沢の第四高等学校でおよそ十年間教鞭を執った。四高では、論理、心理、倫理、ドイツ語などを教えた。明治三十五年に、高等中学校（第四高等中学校）時代の彼の同級生である鈴木大拙に宛てた書簡に次のように述べたものがある。

「余は昨年より学校において倫理の講義をなし居り候。自ら救う事の難にして人に向かって道を説く。君乞う、亡者が導くを笑いたまう事なかれ。……それについて考えるに、今の西洋の倫理学というものは全く知識的研究にして、議論は精密であるが人心の深き soul-experience に着目するもの、一つもあるなし」（No.42, M35.10.27）

西田は若い頃から、倫理・宗教的関心を強くもっていた。いざ、自分が教える段になって、あらためて学校的学問の不毛さを感じ、それを同級生の鈴木大拙に語ったのである。

ずっと後になるが、京都大学に学んだ三宅剛一に宛て、日本的学問の弱点について書き送ったものがある。

「日本人はもっと自分で深く考えねばならない。今では日本人が相当深く独逸哲学およびその他を理解することができ、またそれを小器用に応用することもできるがどうも深いもの大きいものがない、ただ人真似にすぎない。自己の腹の底から出るものがない。哲学は芸術の如く生命の発現にて、ただ Lernen と Anwenden とだけでは何の意味もない」（No.846, S9.7.2）

学問が深い魂をもつべきだという主張は、西田の生涯を貫く主張であり、かつ西田哲学の特質というべきものである。彼は若き時代、すでにこの魂の要求を感じ取ったのであった。日本人云々という書簡の文章は、そうした西田の率直な思いから発する日本的学問論といえる。学問は、学習（Lernen）と応用（Anwenden）だけでは十分でなく、「生命の発現」がなければならないとする主張である。

前に戻るが、金沢で、ドイツ語を教えつつ感じたことを次のように述べている。

「語学はつまらぬものながらどうもある程度までは必要なり。とくに彼の地にでもゆくとすれば語学ができぬではつまらぬものなり。世には西洋へ語学の研究にゆく贅沢者のあるなり」（No.47, M38.3.8, 山本良吉宛）

西田は生涯、洋行することはなかった。しかし、学問研究のために外国で学びたいという気持ちは人一倍もっていたように思われる。ただ彼を取り巻く家庭的、金銭的などの状況がそれを許さなかったのである。大拙と同じく高等中学校の同級生であった山本良吉にあてた右の書簡には、そうした西田のやるせない心情が読みとれる。

四高の学生であった河合良成は、東京に出て勉学をつづけていたが、勉学や進路について西田に助言を求めてきた。これに西田は懇切な返事をしたためた。

「自分は非常に頭が悪いように感ずるとのお話に候が、人が本気に事をやり出すとかかることは誰でも必ず感ずるものと存じ候。外より見ていればできそうなことでもさて自分でやってみるとなかなかに難しきものと存じ候。小説や画の批評は誰もするがさて自分がやってみると容易のものにこれなく候。小生なども筆をとりて紙に臨むや常にかか

る事を感じ居り候。しかしここで挫折してはダメと存じ候。どうでもして此処を破ればまた一寸自分の得力を自覚するところ之あるべく候。書を読みまたは自分で考えて分からぬ所に至れば必ず骨打って静かに精細に考えて見るべく候。丁寧親切に考えて見るべく候。分からねば幾日でも考えて見るべく候。人に教わったのでなく自分の力で一の事が解せらるれば十の事が解せらるべく候。また自分が力を尽くして考え自分で判断しゆくようにすれば始めは実に難しくとも、そのうち遂に自信を生じオリジナリチーも出でくるものに候。学問は単に詰め込みではいかぬ。かくせねば進まぬものに候」(No.71, M41.1.7)

この手紙はさらに、頭脳の明晰と人格とは別問題だとし、すべての根本は人格修養にあると述べている。河合良成に対してはこの後も折に触れて書簡を送り、学問の道よりも実務家の道に進むのがよいと、個人的資質にも配慮したアドバイスもしている。河合は後に農商務省の役人となっている。西田がいかに学生を大切にし、その生涯を見守ったかを示す一例である。

また、明治四十二年当時、京都大学で学生監をしていた山本良吉に宛てた手紙の中で、学生の勉学について論じたものがある。

「今の青年学生にはよく古書を味わしむ必要ありと存じ候。古書を読まずば高尚なる理想的生活を味わうことできずと存じ候」(No.42, M42.6.9)

読書に関しては、同じく「読書」と題した小篇が二つある。大正五年(Vol.13, pp.106-108)と昭和十五年(Vol.12, pp.228-232)に雑誌に寄稿されたものであり、いずれも短いが珠玉の如き文章といってよいものである。さらに、さかの

ぼり明治三十年に書かれた日記帳の表紙裏に、読書について記した（自戒の？）文章がある。この日記の文章を参考までにあげよう。

「他人の書を読まんよりは自ら顧みて深く考察するを第一とす。書は必ず多を貪らず。古今に卓絶せる大家の書をとりて縦横に之を精読す。第一の思想家は多く書をよまざりし人なり。読書の法は読、考、書、一事を考え終らざれば他事に移らず。一書を読了せざれば他書をとらず」（Vol.17, p.3）

明治三十年といえば西田二十六歳の時であるが、この一文を見ると、ここにはすでに大家の趣があるといえよう。読書・勉学について、これほど簡潔にその要諦を述べた文章を筆者（石神）は知らない。

さらに学問について、西田は書簡でこのように述べる。

「学問というものも自分の仕事にあらず。自分にて成し遂げると思えば困難なるも、要するに自分のできるだけのことをして、後の賢者を待つのほかなしと存じ候」（No.238, T7.11.14, 堀維孝宛）

この書簡を書いた大正七年といえば、社会では第一次大戦が終結した年であり、西田自身にとっては母が亡くなった年であるとともに、大著『自覚における直観と反省』を前年に上程し、いわば小休止して新しい方向への模索を始めた年（西田四八歳）である。大学の教授としても、これから多忙にならざるをえない予感があったと思われる。上の文章には、あたかも「五十にして天命を知る」との孔子の言葉を彷彿させるものがある。

「できるだけのことをして後人に託す」という趣旨の文面は、西田の書簡に（この後）多くみられるものである。とくに

門下に対しては、自分（西田）の思想をよく理解して、発展させていってほしい旨が語られている。しかし、終生、西田は自分自身の努力をけっして減じようとすることはなかった。

門下に対しては、西田自身の経験から学問上の助言をしている書簡も多い。次のものはその代表的なものである。

「思想の発展はなお山を登るが如し。とにかく一山を登らざれば更に一山のいかなる方向にあり、いかにして攀づべきかを知ることができないとおもいます」（No.748, S7.9.1, 木村素衛宛）

「学問の道は何処までも自己を欺かざるにあり。何処までも疑い何処までも戦ういやしくも小成に安んずべからず。自分の考えの行き詰まったようなときは人の書物を読むも可ならん。しかし何処までも現実に即して自己の足を以て歩まざるべからず」（No.1046, S11.9.30, 高坂正顕宛）

「他の言によりあまりあちこち考えるのはよくない。君は君の足で君の道をすすまれてよい。君には君でそれでよいところがあると思う。君の特色があると思う。ただできるだけ自分で自分に対し批評的であることが必要だ。そのためやはり反対の考えを顧慮せねばならぬ。独りでpianoを弾ずるにもいつも名人が見ている気持ちでなければならぬ」（No.1200, S13.2.22, 柳田謙十郎宛）

ここにあげた三つの文面に共通するものは、学問を志す者は、自分の課題を徹底して考え抜くことが大切だということであり、小成に甘んじることなく、力を尽くして深みへと達する努力をすべきだという内容である。これは、いずれも西田自身の学問への姿勢でもあり、それをまた門下に懇切に説いたのである。

西田の最晩年、すでに第二次大戦も敗色が濃厚となった昭和二十年の春、鎌倉の上空を米軍の爆撃機が通りすぎる最中、彼は次のような手紙を後輩の久松真一に書き送っている。

「ここも始終B29が頭上を通りますが爆弾は落としませぬ。皆々私にも疎開せよとやかましく云いますがすべて天に任せています。もう老い先も短きこと故、ヘーゲルがイェーナでナポレオンの砲弾を聞きつつ現象学を書いていたと云うつもりで毎日決死の覚悟を以て書いています」(No.2181, S20.4.12)

もはやこの頃は出版もままならず、原稿もいつ戦災に焼けてしまうかもわからなかった時節である。この頃の書簡には、自分の書いた原稿の複写を頼んだり、さらに出版へ心を砕いている文面も多い。「毎日決死の覚悟を以て書いています」という一節には、時代もそして彼の人生も終期を前にして、切迫した状況が浮かんでくる。しかしここには、一刻一刻、まさに生命を刻む思いでペンを走らせる、彼の学問への情熱を読みとるべきだろう。この一節には学問にかけた人生の姿がある。

この手紙を書いた四月には「場所的論理と宗教的世界観」という重要な論文を脱稿し、つづいてすぐに「私の論理について」(絶筆)という論文に取りかかった。二ヶ月後、西田は帰らぬ人となった。彼は、最後の最後まで学問の人であったということができる。

二　家庭と人生

学問的生涯を送った西田であるが、彼の家庭はどうであったか。西田は先妻との間に二男六女をもうけた。彼の人生は

この子等への気遣いや思いに満ちたものでもあった。ここではそうした子と共に歩む彼の人生をみてみよう。

西田は明治二十八年五月、母方の従妹であった女性（壽美（ことみ））と結婚する。そして早くも翌明治二十九年の三月に長女（弥生）をもうけた。このときの思いを山本良吉に書き送っている。

「本月二十五日小生方に一女を挙げたり。余は多く浮き世の網をつくる身となれり。日々己が気力の衰えんことを恐る」（No.26, M29.3.31）

長女（弥生）出生のあと、長男（謙）、次男（外彦）、次女（幽子）が生まれた。その後も、三女・静子、四女・友子、五女・愛子（友子と愛子は双子）、六女・梅子と子供を次々に得ていった。

しかし、明治四十年一月に、四歳になった次女を亡くす。この子供を失うという始めての経験は、西田にとって大きな人生上の試練であった。この時、四高の同僚であった堀維孝に書き送った手紙に、

「余は今度多少人間の真味を知りたる様に覚え候。小生の如き鈍き者は愛子の死というごとき悲惨の境にあらざれば、真の人間というものを理解し得ずと考え候」（No.57, M40.1.14）

と述べている。我が子の死という厳粛な事実に直面し、人間の生死とともに、自らの生の意味を深く考えざるをえなかったことだろう。西田は、さらに同年（明治四十年）に双子の一人（愛子）を失い、大正九年に長男（謙）、昭和十六年に四女（友子）、昭和二十年には長女（弥生）を失うことになる。そしてこの間、大正十四年には妻に先立たれるのである（のちに西田は再婚する）。

こうした家族の死は、西田の人生にとってもっともつらいものであったことは間違いない。この経験は彼の人生観、そして哲学思索にも影響を与えずにはおかなかった。次の三通の書簡は、そうした家族の死に面しての思いを綴ったものである。

「人生何事が悲惨と申しても、我が子の死というより悲しきものはなかるべく……誠に生涯忘るることのできない人生唯一の悲哀と存じ候。小生もこの数年は不幸つづきて、一昨々年脳出血にて倒れし妻は今に生命を維持し居るも全く仰臥のままにて自分にて横臥することすら。一昨年の夏は将に三高を卒業する長男を失い、今に思い出でて人知れず悲哀の涙にくれ居り候。人生の事、何事も期し難く頼み難し。虚現の幻影を追う我等こそ憐れむべき者にて候」(No.305, T11.1.30, 堀維孝宛)

「荆妻今日の事あるは昨年来覚悟いたしおり、今更心を動かすようなこともないと思います。しかし今は我が家という如きものが消え失せて遠き国にさまよう旅人のような心持ちが致します。去年の秋　窓際近く植えし花　咲きか散るらむ見る人なしに」(No.368, T14.1.28, 久松真一宛)

「弥生のことは何としても思い出され無限の淋しさと深き悲哀に沈んでおります。私も七人の子供をもちましたが、もはや四人は私に先立って逝き、あと三人になりました。幽子の死にはじめて子を失いし悲哀を味わい、弥生の死に子に先立たれし老人の悲哀を知りました。どうか残る三人相親しみ相助け、共に美しき情愛の生涯を送って下さい」(No.2128, S20.2.25, 西田外彦宛)

はじめのものは四高の同僚、堀維孝が中学三年の息子を失ったことに対して弔辞の意を込めた書簡の一節である。次のものは、長く患っていた西田の妻壽美の死に際して、後輩の久松に送ったもの。そして三つめは、西田自身の死に先立つ四カ月前、長女弥生の死に接し、次男外彦に宛てて晩年の心境を綴ったものである（なお、弥生の死に対して、「弥生は死んでしまった」との一文に始まる「上田弥生の思出の記」（Vol.12, p.261）と題する遺稿がある）。

これらの手紙を見るとき目につくものは、「悲哀」という繰り返される表現であろう。まさに西田にとって、人生とは悲哀であり、無限の悲しみを伴ったものであった。そして、西田はまさしくこの悲哀にこそ、人生の真実の深みを感じ取ったのでもあった。さらにいえば、彼の哲学的思索を深めたものも、この人生の悲哀に他ならなかった。

四十歳になった明治四十三年、西田は京都帝国大学の助教授として赴任した。この頃、四高時代の同僚であった田部隆次に宛てた文章には、西田のこれまでの家庭的経験をふまえて、大学の先生なるものの人生観について述べたものがある。

「君の先日の手紙のように大学の先生というようなものは真に人生を知ったものかどうか疑われて仕方がない。涙を以てパンを食うたことのない人の人生観はいかほど価値のあるものであろうか」（No.131, M43.10.30, 田部隆次宛）

ここで西田は、どれだけ人生の深みを知ったかによって、学問の価値が決定されるといっているように思われる。すでにみたように、「人心の深き soul-experience に着目する」ことこそ倫理学をはじめとする学問の正道であるとは、若き頃からの彼の信念でもあった。

家族に寄せた西田の書簡は、いかにも情愛があふれている。また、父親としての責任感から、人生の指針を与えてもいる。とりわけ、長男の死去のあと、次男であった外彦に対してはその進路や身の回りにたいへん気をつかっている。

外彦が二十歳の頃、進路について悩んでいた（哲学をやりたいと思っていたようである）が、それに対して西田は長文の手

紙を数通送って自分の考えを述べている。そこには父親として、また学問の先輩としての意見や注告がみられる。

「何事にても一旦志した仕事に向かって真面目に長年努力しなければ成功するものでもなく、また興味が出てくるものでもない。……すべて学問は深く入れば入るほど興味の生じるものである。哲学や文芸は一寸面白そうだが、少し本気にやりかかれば非常に困難のものにて茫漠として捉えがたく誰も迷わぬものはない。すぐいやになりやめる気になりやすい。……文学や哲学を専門にせねば人生に意味がないとか不幸とかいうことはない。人生の目的は人生に対して真摯なる仕事をするによって解せられる。……人は真摯に努力すべき目的なきより淋しいものはない。この手紙は他日きっと分かると思う」(No.317, T11.8.15)

後に外彦は高校の物理の教師となるが、二度出征もし、そのたびに西田は事細かな指示も与えた。また外彦の妻である麻子に対しても、さまざまな配慮を尽くしている。

こうした謹厳な父親、先輩としての反面、外彦の子供、つまり西田の孫(幾久彦)に対してはランケーとあだ名を付けて、目に入れても痛くないほど可愛がった。

「ランケーどうか早く遊びに来てください。さびしくてたまらぬ。交通巡査ピリピリオジーチャンスルノデナイでもいたしましょうか」(No.658, S6.1.25, 西田麻子宛)

「ランケー早くお出でよ。大きなカステラが来たよ」(No.685, S6.7.13, 西田幾久彦宛はがき)

ここにいるのはまったくの好々爺である。悲しいことの多かった西田にとって、孫との一時ほど心休まるときはなかったのであろう。昭和十六年、文化勲章を受章したとき、全家族が一堂に集まった。そのとき孫が九名揃ったが、西田にとって文化勲章の受賞より、これらの孫の顔を見るほうがよほどうれしかったにちがいない。

ところで、西田は娘に対してはとくに気をつかった。この時代、娘の結婚は親の責務でもあり、また最大の心配の種でもあった。とくに三女静子と四女友子は病弱（肺の病）であり、そのために西田は好きであった煙草をやめようと努力した（大正十年から十二年にかけて日記には禁煙と格闘する記事が多い）。そして娘の結婚の斡旋を知人、後輩に頼んでもいる。

「私の三人の娘は何処を出た人でもよい。仕業も請負師とかこの頃の政治家というようないやなものでなければ何でもよい。人物が信頼でき、相当に立っていける人ならよい。別に偉い人を望むことはありませぬ」（No.449, S2.6.29, 山内得立宛）

請負師と政治家を並べているのは目を引く。西田にとって、当時の政治家はいやなものであった。日本の政治家の視野の狭さ、学問への無理解を西田は強く感じていたのである。

もう一つ、娘の静子に宛てたものをみてみよう。これは西田の晩年に、静子が京大で手伝いとして働くようになったときの手紙である。

「私の娘だといって文学部の書記にでも小使いにでも決していばった風をしてはならぬ。誰にもかれにも謙遜丁寧にせねばならぬ」（No.1904, S19.3.4）

四十歳になろうとする娘であるが、やはり娘はどこまでも娘なのであろう。いかに西田が著名な学者であろうと、子に対しては世間の親とまったく同じく、生涯心配しつづけたのである。

三　時代の波に抗して

西田は学問・文化の興隆こそ国家の基礎であり、また日本の将来を築く唯一の方法であると信じていたといってよい。

「我が国将来の発達は何というても我が国において世界の文化に対立するだけの文化を築きあげる外に将来の国策はなかるべしと存じ候」（No.304, T11.1.25, 山本良吉宛）

しかし、彼の生きた時代、とくにその後半生は戦争への傾斜が急速に強まっていった時代であった。西田が京大を定年退官した昭和三年は、治安維持法が改正され（死刑が加わる）、特高が設置された時代でもある。そして、満州事変（昭和九年）から日中戦争（昭和十二年）へと進み、さらに太平洋戦争（昭和十六年）へと突入していった時代であった。軍部の政治支配は日を追って強まり、学問はたんに国策に利するものだけが取り入れられ、自由な学問活動は遠ざけられていったのである。

西田が「場所」の立場をうち立て、経済学者にして実業家の左右田喜一郎によって「西田哲学」との名称を冠せられたのは、まさに大正から昭和へと移る年であった。しかしこの左右田もまた社会の犠牲となった。関東大震災から生じた経済不況のあおりを受け、銀行の頭取でもあった左右田は病を悪化させ、四十六歳の生涯を閉じたのであった。これに西田が心を痛めたのは当然であった。

「左右田君のことは全く同感に存じます。誠に気の毒の至りに存じます。同君にしても今死んでゆかれるのは残念であったろうし、我々としても今死なせたくはなかったと思います。銀行も何とかなり銀行などやめて専ら学界に働かせてみたかったと思います」(No.452, S2.8.18, 山内得立宛)

西田は、この若き俊逸に日本の学問の将来を期待していたのであろう。時代の悪気流がこうした有能な人材を奪っていく事実に西田は気づかざるをえなかった。そしてこの自覚が、また西田自身の学問への献身を深めていく活力になっていったのであろう。「自分のできるだけのことをして」という思いが深く彼の心に定着したにちがいない。

西田は外彦の嫁である麻子に宛てて、こう心境を語っている。

「そう長く生きたいとも思わぬが、何か自分が成さねばならぬ学問上の仕事があるように思われ、これだけはどうにかしてと思うのです」(No.499, S3.11.11)

実際、西田の学問的生涯において、大学教官の時代と、定年退職して隠居届けを出した後の時代とを比較した場合、まったくといってよいほど彼の学問的生産力は変わっていない。むしろ、「場所」の立場の確立以後、西田哲学としての本格的思索、論理構築の作業に拍車がかかったといってもよい。それは内奥から彼を突き動かす言い難い力によるということもできるが、西田は学問をもって我が使命とし、ひたすらこの道を進むことが己のなすべきことと考えたのである。

しかし、そうした学問構築の道に立ちはだかったのが時代の反動勢力である。昭和五年頃からそれまでの政党政治が崩壊し、ファシズム勢力が台頭し、さらに軍閥政治へと移行していく。西田は、こうした右傾化が学問の道を閉ざすことを、

敏感に感じざるをえなかった。

「我が国の皇室というものが反動的な勢力と結びつくということはこの上なき危険のことと存じます。……文部省の精神文化というもの、あれはとてもだめだ。私は今後、私の力のつづく限り自分で書くとともに、優秀なる青年学徒を集めて、これらと弁論討究して、これらの人を少しでも思想的に陶冶したいと思う。万一それによって思想上学術上、何らか少し結果を出すことを得ば、我が事たれりだ」(No.758, S7.11.8, 山本良吉宛)

そして実際、西田はこの書面の通り実行したのであった。すなわち彼は、たゆむことなく論文の執筆をつづけるとともに、後輩との交流に意を注いだのである。退官後も、京都において、鎌倉において、ほぼ毎日といってよいほど誰かが西田の所を訪れたり、また西田が訪れたりしていることが、日記を見るとわかる。また会えない後輩には、手紙のやりとりをしたのである。そうした後輩には、卒業生だけでも、勝部謙造、久松真一、山内得立、務台理作、三木清、高坂正顕、西谷啓治、高山岩男、澤瀉久敬、落合太郎などといった人々がいる。西田は出会いを大切にし、ときには賞賛し、またときには叱咤しつつ、一人一人の個性を伸ばすことに努めた。この後輩を愛し育む西田の言行が、いわる京都学派と呼ばれる学問的潮流の一つの本質的要素となったことは間違いない。

一方、代議士の中には、かつて西田が教えた学生出身の者もいた。むろん彼はこうした後輩を分け隔てすることはなかった。しかし西田のみるところ、もはや代議士には時代を変える力を見いだすことはできなかった。

「先日、高見之通という四高で昔教えた政友会の代議士が来たから、私は真っ向から山本などいう人の態度かねて政友会の態度に批判の言をあびせました。何か相当の反駁とか弁解とかいうものがあると期待したが、一言もなく分か

った様に如何にも感心した様に聞いていました。じつにその浅薄無知に驚きました。……あれで国家の大事を議定せられては全くたまりませぬ。誠に歎ずべきものです」（No.920, S10.5.4, 原田熊雄宛）

この書簡を記した昭和十年は、美濃部達吉がその天皇機関説が右翼から糾弾されて、東大憲法学の地位を追われるという事件があった年である。このことは西田にとっても他人事ではなかった。学者が学問上の見解を糾弾されてその地位を追われるということは、学問の自由の否定である。この事件は、国家権力による学問全体への大きな迫害といわざるをえない。西田の為政者への怒りは収まらない。

「例の憲法問題、陸軍大臣などどうしようというのだろう。新聞にあるように国定解釈というものでもきめようというのか。学者はどういう解釈をしたからとて、政治家や司法官は国策上不可とすればとらなくてもよいではないか。学者には学問上十分の研究をさせなければ、将来真に学問上権威ある日本憲法の理論というものはできないと思う。ミノベ氏の説をよいというのではない。他の説がまけたのは他の学者が学識才能の足らざるによるのである。……軍隊では学問の解釈も権力で定めてよいように思うかも知らぬが、それではかえって学問の進歩を阻害する事となると思う。将来も同じことを繰り返すばかりだ」（No.925, S10.5.19, 山本良吉宛）

昭和十二年、日中戦争が開始され、日独伊防共協定が結ばれる。それとともに、言論統制のもと、検閲も強化されるようになる。昭和十三年には国家総動員法が施行され、翌十四年には国民徴用令が公布される。さらに十五年になると日独伊の軍事同盟が調印され、国内では大政翼賛会が発足する。そして、文化思想団体の一切の政治活動が禁止されるのである。

西田の書簡にも政治に関する記述が多くなってくる。信頼できる友人や知人に対しては、思うところを率直に述べたのであろう。この時期の書簡を読むと、時代の迫りくる危機がひしひしと感じられる。

「世事御感想の事、真に同感。かかる状態にては国家の前途も心配に堪えずと思います。かくも軽佻浮薄にして、いかにして歴史以来の世界の危機とも言うべき今日の世界に処すべき」(No.1366, S14.8.26, 山本良吉宛)

西田は、日本がすでにのっぴきならない状態に陥り、この閉塞した状況がついにはドラスティックな変化を招来させるだろうと感じていたようにも思われる。

「人間の世界というものはいつまでも今日の如き状態にありえないだろう。ノアの洪水の如きものの来るなきを誰か保障し得ん」(No.1370, S14.9.2, 堀維孝宛)

「我が国には真に大所高所から国家のこと考える人なく、ありても力なく致し方なきことと存じます。どうも今のところ、行くところまで到ってみなければ分からぬという有様と存じます」(No.1568, S16.4.12, 鈴木大拙宛)

「抽象的な標語の大言壮語、希望と可能との簡単な混同、こういう風に(軽薄な非着実的に)のみ人心が動いていっては将来どうなるものにや」(No.1608, S16.9.16, 山本良吉宛)

昭和十六年正月、西田は天皇に進講をする(三月には文化勲章を受章)。この年、西田は論文「国家理由の問題」(岩波講

座『倫理学』に掲載。全集第十巻に収載）を発表し、彼の国家観を哲学的見地から述べた。それは天皇への進講の内容（全集第十二巻に「御進講草案」として収載）と同じく、現代の国家は「世界においてある」国家だということであり、そうした「歴史的世界自覚」こそ指導者に必要だという主張であった。この「国家理由の問題」論文については、西田は他者にどう読まれ解されるかに大きな関心をもっていたようであり、務台理作、和辻哲郎、木村素衛らに対し、卒直な意見や感想を述べるように促したことが書簡に伺われる。

西田の国家観について詳しく論じることはここでは避けるが、彼の国家観は天皇中心の国家観に立った保守主義だとして戦後に批判されもした。たしかに彼は皇室には崇敬の思いを抱いていたように思われる。しかしけっして頑迷固陋な国家主義、保守主義に立つものではなく、文化の発展、学問の興隆を基礎とした平和国家（そして世界平和）をめざして、自国（そして東洋）の伝統文化を見直し、その世界性を自覚することが重要だとするものであった。

だが、時代は彼の主張とは異なる方向へと進んでいった。昭和十八年からは前線から日本軍の撤退が始まり、昭和十九年六月にはサイパンが陥落するにいたった。この頃の書簡にこうある。

「サイパンの方、大概想像し居ります。いよいよ私どもが最初から心配していたように迫ってきたのではないかと思います。一に為政者の先見の明なきの致する所、国家を亡ぼすものは何人か」（No.1952, S19.7.3, 木村素衛宛）

そしていよいよ昭和二十年三月には硫黄島の日本軍が全滅、東京大空襲。四月には米軍が沖縄に上陸を開始する。各地への空襲も日を追って激しくなってくる。東京大空襲の頃、親しい知人であった長與善郎（西田より二十歳ほど下）に宛てて、次のような書簡をしたためた。

「我が国の現状については一々尊兄の御手紙と御同感、実に実に憤慨の至りに堪えませぬ。不幸にして私どもの予見していた通りになりました。田舎共の世界見ず、驕慢無謀の自業自得の外ありませぬ。しかも今日に至りてなお総理以下空虚な信念を呼号しているに過ぎないでありませぬか。こんな風にして国民が引きづり引きづられてどん底に陥れられて国民が全く自信を失ってしまうようではもはや再起の途もなくなりはせないかと恐れるのです。私は国体を武力と結びつけ、民族的自信を武力に置くというのが根本的誤りではないかと思うのです。古来、武力のみにて栄えた国はありませぬ。武力はすぐ行き詰まります。永遠に栄える国は立派な道徳と文化とが根底とならねばなりませぬ。……私は日本国民は相当優秀な国民と信じます。ただ指導者がだめであった。残念の至りです。そして学者も文学者も深く考える所なく、ただこれに便乗追従するにすぎませぬでした。私は今日ほど国家の思想貧弱を感じたことはありませぬ。

私ももう老年、もう何年生きのびるか分かりませぬ。とくに今日の如き生活状態にては、何とか若い人々の奮起をいのります。東京の事、実に悲惨酸鼻の至りに堪えず」(No.2147, S20.3.14)

この書簡は、すでに己の余命がいくばくもない（余命何年どころか、この書簡より三ヶ月後には世を去ることになる）ことを予感しつつしたためた文面であろう。ここには西田の思いが凝縮して述べられているということができる。

人生最後にあたって彼の思ったこと、それは文化国家たるべき日本の将来には、よい指導者がどうしても必要だということ、そしてこの指導者育成の事業は、後輩の教育者にそれを託すほかないということであった。次の書簡は、かつて西田に学び、終戦の年には京都大学教授となっていた高山岩男に宛てたものである。

「学生の力が大いに落ちました由、そうだろうと存じます。これからの学生は尚々ひどくなるでしょう。全く情けな

いことです。しかし君などはそれで教師がいやになるなど云うのでは困る。君などに大いにやってもらわねばならない。今年はいつまでも寒い。まだ冬のままの着物でいる」(No.2189, S20.5.6)

この書簡よりちょうど一ヶ月後の六月七日、終戦を待つことなく、西田幾多郎は鎌倉の自宅で七十五歳の生涯を閉じた。

※引用について

本稿における引用は、すべて西田幾多郎全集（岩波書店）第三次版を用いた。書簡はそのうちの第十八、十九巻である。文章は読みやすくするために、適宜、現代仮名遣いになおし、旧字を新字に変え、また句読点を補ったものがある。引用文中の（……）は中略を示す。書簡からの引用文のあと、括弧内に書簡の通し番号（No.）および日付（M：明治 T：大正 S：昭和）を記した。また、宛先もすべてわかるようにした。書簡以外からの引用は、括弧内に巻数（Vol.）・頁数（p.）を記した。なお、本稿における年齢はすべて満年齢である。